

DHARMA EYE



法眼

## 『国際センター発足にあたり』

曹洞宗宗務庁  
教化部長 宮川敬學

既にご承知のように、昨年7月より『曹洞宗国際センター』が発足し、活動をはじめております。

この国際センターは、旧来の『北米開教センター』を発展的に解消し、新たに再組織いたしましたものであります。

宗門では新世紀を迎えるにあたり、前世紀の末から21世紀の当初にかけて、過去100年間の宗門の歩みについて、見直しのための点検作業をいたしました。

宗門の海外布教についても、21世紀のみならず恒久的な国際的布教教化のあり方を視野に入れて、同様の見直しの作業をいたしました。その結果幾つかの課題を確認いたしました。

本宗の海外開教は、1903年(明治36)年ハワイ並びに南米ペルーにおける日系移民に対する布教活動を嚆矢として、以降、北米・ヨーロッパと順次開教活動が始められ今日にいたっておりますが、100年を経過した今日、布教教化の対象は多様化しております。

すなわち、当初の教化対象であった日系移民も3世・4世の代になり日本文化の伝統や、日系寺院のあり方も変容しつつあります。また、一方では多くの禅センターに代表される坐禅を中心とする人々の活動が世界の各地で顕著であり、出家得度をし僧侶を目指す人々が増加しております。

情報化・国際化のより一層の進展が確実視される21世紀の当初にあたり、このような宗門の海外布教の抱える諸問題に適切に対応し、より積極的に展開していくためには、これまでの対処療法的な姿勢を改めて、恒久的な視点にたった基本理念を確立し、今後の施策に生かしていくことが必要であります。

「曹洞宗国際センター」は、以上のような宗門のこれまでの海外布教における隘路を解消し、積極的な布教教化の展開をはかるための機関として設けられました。従来の「北アメリカ開教センター」は北米総監部の傘下に位置付けられた組織でありましたが、新たに再構築された「国際センター」は、北アメリカ・南アメリカ・ハワイ・ヨーロッパの各総監部と密接な連携を取りながら、

全世界を視野に入れて、今後の国際布教活動の中核的役割を担うこととなります。

また、あわせて「海外開教」の用語については「国際布教」と変更がなされました。これに伴い、「開教師」は「国際布教師」に、「開教総監部」は「国際布教総監部」にそれぞれ名称の変更がなされました。

私たちは、これまで以上に、皆様と共に手をとりあって新しい世紀の国際的な仏法興隆のために、一層の努力をいたしたく考えております。既にご承知のように、昨年7月より『曹洞

## 国際センター発足にあたり

秋葉玄吾

北アメリカ国際布教総監

「尽十方世界 一箇明珠」と玄沙師備は人に示され、道元禪師様はこの言葉をもとに、実在に関する独特の根源的思索を展開されました。

禪師様は拈提されます。

「尽十方世界は広大にあらず、微妙にあらず、方円にあらず、中正にあらず、活發發にあらず、露廻廻にあらず。さらに生死去来にあらざるゆえに生死去来なり。恁麼のゆえに昔日曾此去にして而今従此来なり。」

森羅万象そのままの世界である、といわれます。

大、小、角、丸、増、減、生、滅、正、偏、淨、醜・・・を判断するのは人間の認識である。もともとは単に現象しているだけである。生まれたり、死んだり、去ったり、来たり・・・の人間世界実態もまた「尽十方世界」のことである。過去、現在、未来の時間もまた、この世界の内のことです。

したがって、昔日も而今も、今この瞬間の「尽十方世界」から去った、来たとはい得るのです。

そこで道元禪師様は、

「一箇珠は・・・」

と、この世界の実在の根元へ向かって言い放たれます。

「一箇珠は直須万年なり、亙古未了なるに亙今到来なり。身今あり、心今ありといえども、明珠なり。彼此の草木にあらず、乾今の山河にあらず、明珠なり。」

「この全宇宙は、一箇の明珠である。始めも終わりもなく、全空

間、全時間を凝縮して、この一点に結ばれた我が身心が、すなわち一箇の明珠である。全身、ただこれ一つの正法の眼である。全身これ一つの真実体である。全身これ一句である。全身これ光明である。」

と、禪師様は遅く言葉を連射され、世界と我が身とが法界において同体であることを開示されたのです。

「なんと、我々は明珠を愛せずにはいられない。明珠、かくのごとくの彩光きわまりなきなり。」

と、禪師様は讚嘆するのです。

さて、私に与えられたこの文の題は、「国際センター発足にあたり」で、冒頭からいささか突飛な話題を持ち出し、多少奇異な書き出しと思われるかも知れません。

しかし「曹洞宗国際センター」は、「一顆明珠」なのです。光彩きわまりなき諸活動を、将来において展開してゆく明珠であります。北アメリカのみならず、ハワイ、ヨーロッパ、南アメリカ、オセアニアと世界各地に点在し、急速に増加しつつある寺院や曹洞禅センターを繋ぐ架け橋なのです。彩彩光光明珠の架け橋です。その活動の一つ一つが正法の光明を片片条々に放つ十方界の功德です。

明珠は転がったり、止まったり、様子を変えていくようでありますが、そのまま明珠であります。

道元禪師様は弘法救生の誓願を建て、強靱な行動、思考、創造、そして求法の力を発揮し、全身これ一隻の正法眼であり、全身これ光明であることを証明され、我々に真実無上の根元的世界観を開示されました。

その行履に倣い、国際センターのスタッフの皆様には、身心堅固なる明珠のごとく各自個性の彩光を放ち、全身心を挙して、全身これ全身なることを祈ります。その時、国際センターは一顆の明珠を現成するのです。

道元禪師様はお示しになりました。

「全身まる出しのとき、全身に一点のさわりもない。まんまるで、どこにも角がなく、ころころと転がっていく。」と。

「曹洞宗国際センター」が発足し、その活動体制を十分に整えられ、「明珠」の光明を放射するにあたり、まず祝寿を申し上げます。北アメリカ国際布教総監としては、殊に、この北アメリカの地に曹洞禅が確実に根を張っていくための、考え得る最も有効な諸活動を展開されることを切に願うものであります。

## 国際センター発足にあたって

### 原田雪溪

#### ヨーロッパ国際布教総監

曹洞宗国際センターが発足したのは、たまたま私がヨーロッパ国際布教総監として就任いたしました2002年7月とほとんど同時期でしたので、ひとしお感慨深いものがあります。

現在、人類社会は混沌を極めておりますが、このような時こそ、洋の東西を問わず佛陀の教えが大きく、かつ深く世界の国々に浸透していかなければならないと存じます。

佛陀の教え、すなわち佛教には、「坐禅」を土台として佛道の根源が明示されております。したがって、「只管打坐」と「即心是佛」「平常心是道」の言葉に代表される曹洞禅が示しているのは、時間や場所にまったく係わりなく、佛祖の教えに遵って坐禅修行すれば、必ず佛法（修証不二）に目覚めることが可能であるということです。

曹洞宗ご開山永平道元禪師は、「已れ未だ度らざる前に、一切衆生を度さんと発願し、営むなり」というお言葉で菩提心を表しておられますが、「四弘誓願」（衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願断 法門無量誓願学 佛道無上誓願成）という願文が、この菩提心を端的に示しております。

「衆生無辺誓願度」人間は生物の殺生なしに生きていくことはできません。普段の生活ではそのことを当たり前のように思い、感謝の念も起こりませんが、人間は他の動物と違い、佛道を求めることができます。ですから、「誓って一切衆生を救おう」という誓願の下に、生物の命を殺傷し、形枯を療じながら自分の身を支え、坐禅をさせていただくことに感謝をしなければなりません。

「煩惱無尽誓願断」三毒五欲という言葉がありますが、「三毒」というのは貪・瞋・癡、「五欲」というのは眼・耳・鼻・舌・身という諸々の自分の心を悩ますものです。ちなみに煩惱とは、自我の迷執によって本来一つであるものを二つに見て、自と他の距離をつくることです。これらの一切を断ずるために坐禅に努めることを誓わなければなりません。

「法門無量誓願学」釈尊の説かれた経文をよく勉強し、信じ、そして戒を守ることを誓います。佛教には「教外別伝の法」がありますが、禅宗ではそれが坐禅です。

「佛道無上誓願成」以上のようにして佛の道に目覚めることを誓います。一度戒を受けたということは、懺悔を繰り返しながら法を成就することができるということで、この願文をお唱えします。

この四つの誓願を人類共通の指針として、末法を正法にめぐらす機運を高めていく義務があることを痛感しています。

さて、私どもの布教の拠点となる総監部は、ヨーロッパ十八カ国に及びます。すなわちオーストリア、ベルギー、チェコ共和国、デンマーク、フランス、ドイツ、ギリシャ、イギリス、イタリア、ノルウェー、オランダ、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、スペイン、スウェーデン、スイス、ハンガリー等の国々ですが、これらの国においては二十年間に及び総監部が機能していなかったことにより、「戒律」を重んじない「禪」が広まってしまいました。その結果、「似て非なる」といわれる禪が跋扈し、佛教を真面目に求める人が禪病に汚染されていることにすら気づかずにいる現状です。

そこでヨーロッパ総監部としては、前述の「四弘誓願文（菩提心）」と「禪と戒」との関係、すなわち「禪戒一如」を指導方針の基礎として現職教育を実施し、数百人に及ぶのではないかとされている得度者や授戒を受けた方々に呼びかけて研修会等を実施し、禪病の除去に努める所存です。

ヨーロッパの国々は歴史、宗教、民族、文化、言語、習慣等がそれぞれ異なっているために布教は極めて困難が予想されますが、「世界は一つの法界である」という佛陀の教えにより、「回互」と「不回互」、「明」と「暗」の祖師方のお示しを十分理解していただきながら、理想的な佛国土の実現に努力してまいりますので、何卒諸老師方はもちろん、各方面の有識者の方々のご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

## 禪とひとつになって生きる

### 一日常生活のあらゆる側面に注意を向けること

#### レッシユ・雄能

##### ヨーロッパ伝道教師・海印三味道場

昨年開催された伝道教師研修所の課程のなかで、わたしが特に感謝したいのは、原田老師や曹洞宗宗務庁の代表の方々から受けた暖かい歓迎、親切、そしてわたしたちに何かを一方向的に押し付けようとはしない開かれた態度です。

研修所には熱意と友情がありました。それは僧侶達の修行にはっきりと表れていました。法の伝授に関する大変重要な問題についての原田老師による提唱、奥村師による『永平広録』の講義、そして原田老師との独参の素晴らしさには感謝の念を禁じえません。それらはわたしたちを修行の本質へと連れ戻してくれました。弟子という立場に置かれることによってわたしは「初心」というものを再び発見することができました。

朝の4時から夜の9時半まで休むことなく修行が続けられま

したが、それはわたしたちに個人的な執着を手放して他の人々と一致団結して研修所の生活リズムに従うよう強く促しました。また、仏法と同じくらいの古い歴史をもち、我々僧侶の修行と在家人の生活をつなぎ、人々に布施することの喜びを与える「托鉢」の修行も行なわれました。目立つことなく自分の役職を見事に果たした典座職の僧侶が供養してくれた素晴らしい食事と分量器を用いた行鉢によって食べることに深く集中できたことにも大変感謝しています。

朝の坐禅のあとに行なわれた、短時間ではあったけれどもかなりきつかった作務は一日を始めるにあたって大きな活力を与えてくれました。坐禅と並んで、日常の生活のあらゆる側面（たとえば東司に入るまえに法衣を脱ぐこと、浴司に入る前に礼拝をすることなど）に注意を向けることを学べたことにも感謝しています。法要の進退を習うことはいま・ここに集中することを促しましたし、送迎や副堂、殿鐘、導師などの諸役を交代で務めることで仲間同士の調和を深めてくれました。

規則や法要を教わる時には、つねに「ここ発心寺ではこのようにやっています」というふうに説明されました。それが唯一の正しいやり方だという教え方ではありませんでした。規則はここでは手かせ足かせではなくわたしたちのもつ深遠な自由を行使するための枠組みなのです。

## 初心—新鮮な眼、新鮮な耳

#### ワンゲン・靈元

##### ヨーロッパ伝道教師・龍門寺

以下に述べるのは昨年発心寺で開催された伝道教師研修所でのいくつかの印象です。

朝課で昨日と同じ間違いを繰り返している我々を見ている僧の信じられないというような顔つき。わたしが東司用のサンダルを履いて廊下を歩いているのをみたもう一人の別な僧の狼狽したような顔つき。

母親からもらった百円硬貨をわたしの頭陀袋に入れてくれた少女の黒い瞳の中にあつた輝き。人目を引くような大きな図体をした西洋人が鐘を鳴らしながら何を求めて街の通りへやってきたのか、理解しかねている通行人達の奇妙な表情。

われわれが別れの挨拶をしたときに涙を流しそうになっていた畑仕事を担当している僧の表情—われわれとの別れに深くこころを動かされた者がすくなくとも一人はいたのだ。朝の4時から夜の10時まですべてのものに新しい眺めがあった。もっとも些細な行為でさえ努力が必要だった。小さな努力であってもそれはれっきとした努力だった。障子を閉めること、電灯を

消すこと、洗面所に行くときにサンダルを履きかえること、東司に入るときにはまたサンダルを履きかえること、そこから出るときにはそれを忘れないで脱ぐこと、仏殿を通り過ぎるときには合掌をすること。

応量器を使う食事のこと。また間違いを犯すのではないかと胃に塊があるような気持ちで道場に行くときのこと。自分たちが母国で30年の間唱えてきた般若心経でさえ違ったふうに読まれている、あらゆる点でまったく違っている法要。あまりに速くとなえられるので読むことすらできない（唱えることなどもろんできない）いくつかのお経。道場の規則や作法。道場の単は衣の袖が長くてそれに自分のからだがつれてしまいかねないことを思い知らせてくれた。それまで体験したことのない感覚を起こさせた提唱や独参。音、坐禅中の単調な騒音、動物達までが違う声で鳴くこと（日本の蛙はやかましい）、鳴らしものが母国とは違ったふう鳴らされること、風の唸りや落ちる雨音さえもが母国とは違ったふう聞こえること。

初心-新鮮な眼、新鮮な耳、つまり若々しさの本当の泉！

## 「伝法」の修行

### オコナー・洞然

#### 北アメリカ伝道教師・ミルウォーキー禅センター

2002年11月に発心寺僧堂で開催された伝道教師研修所での最後の講義において、原田雪溪老師は未来の世代に法を（本質においてもまた教義としても）正式に伝えることの必要性を強調しました。そして、わたしたちがこの法の伝授をおこなう器にならなければならないと強く語りかけました。わたしにとって、この法の伝授という問題は何世紀もの時間を経てわたしたちのところまで伝わってきた、伝統と現在との両方のなかに深く根をおろしているように思われます。伝統と現在というこの二つの要素をどのようにうまく混ぜ合わせれば、わたしたちが日々会う人々に利益をもたらすことができるようになるのでしょうか？

わたしがこれらの講義に耳を傾けていたときにおける「現在」とは、足が氷の塊になったように感じられるほど寒い「現在」でした。11月という時期の古い日本の僧堂は、わたしにとっては木の床、紙の壁、そして冷たい空気以外のなにものでもありませんでした。時々わたしは自問自答したものです。「伝道教師、あるいは『伝法師』としての正式の任命を受けるために、ミルウォーキー禅センターの住職という重責を放り出して日本に来て、自分はいったいここで何をしているのだろうか？」と。

ひとつには宗制上の必要性があったからです。わたしの師である秋山洞然師は2001年6月にアンカレッジ禅コミュニティ

に移り、わたしをミルウォーキー禅センターの後継者に指名しました。アメリカにおいてはそれはそれで何の問題もなかったのですが、わたしには伝道教師の資格がありませんでしたので、日本の宗制の上ではわたしは指導者としては認められなかったのです。そういう事情からわたしは、（わたしたちのメンバーの1人が使った幾分揶揄のこもった表現を借りれば）「資格を得るため」にここ発心寺にやって来たのです。

しかし、発心寺にやってきたのはそれだけのためではなく、もっと深い意味もありました。それは曹洞禅の伝統との結びつきを、もっとしっかりしたものにしたという強い願いがわたしにはあったからです。「曹洞禅の伝統とのつながりを確かなものにするのは知的な作業や学習によって達成することが可能かもしれないが、伝統的な修行のなかに実際にこの身体を投げ入れ、自分から決して離れることのない進退や態度の習慣を深く身につけることも確かに必要だ」とずっと以前から実感していました。

さて、そういうわけで70歳のわたしは発心寺にやって来ました。5月に行こなわれた研修所第1期はわたしにとってとてもひどい始まり方をしました。というのは、大阪へ向う飛行機が機体の故障のために大幅に混乱し、9時間も遅れて到着したのです。ですから発心寺に着いたのは、予定よりだいぶ遅くなっており、わたしもひどく疲れきっていました。日本人僧や西洋人僧たちが長い飯台に坐って、遅れてやってきたわたしが坐禅用の腰掛けが入った大きなスーツケースを引っ張りながらはいってくるのを好奇の目で眺めていた光景を思い出します。左の膝からは軟骨を切除し、右膝からは軟骨を削るという外科手術を受けたという医師の証明書を前もって提出していたので、特別製の腰掛けに坐って坐禅をする許可をもらっていたのです。この特別のはからいは、勤勉な日本人僧たちから、多くの親身ないたわりの最初のものでした。

わたしの研修所での「印象」を書いて欲しいという要望ですので、いまだにわたしの心に残っているいくつかのイメージを書かせていただきたいと思います。暗闇の中で自分の持ってきた目覚まし時計が振鈴の時間よりも5分早く鳴り響いている光景を思い出します。こうして他のみんなより早めに起きることで、懐中電灯を使ってコンタクトレンズをつけ、裸足で洗面所に駆けつけ歯を磨き冷たい水で顔を洗い、急いで衣に着替え、暖房のスイッチが切れているかどうかを最終的にチェックすることができる時間的余裕ができたのです。闇の中を歩いて禅堂に向かうのですが、時には廊下を静かに通っていくその途中で、欠けた月が照っているのを目にすることもありました。

朝課のあいだ、それ以上はもう薄くなりえないと思われるほ

ど薄っぺらな坐蒲の上に、必死の思いでまたがるようにして正座していた、わたしの両膝と足首がどんなふうに(痛みのため)悲鳴をあげていたかを思い出します。また安定した心地よい読経のリズムと法についての古の理解(参同契・宝鏡三昧・寿量品偈)を読み上げる声の流れを忘れることができません。わたしは足の痛みにもかかわらず朝課が大好きになりました。

聖護寺において毎日2回正式な5つのお椀のセットを使う応量器での行鉢を10週間にわたって修行したことがありましたし、ミルウォーキーでは毎週1回、朝食を正式なやり方に従っていただいています。そういうわたしでさえ、発心寺で供された(美味しい)おかずの数の多さ、そしてセツは応量器をきれいにするためにだけに用いられおかずのお椀をきれいにするのはお箸と漬物を使っておこなう初めの作法にはじめのうちは当惑させられました。発心寺ではおかず椀にはセツを使わないのです!

最初の2週間のあいだ、わたしたちは自分が、仏法のフォウグラ(ガチョウの肥大した肝臓)を作るために無理やり食べ物をからだに詰め込まれているガチョウになっているような気がしていました。差定にはまったく休憩時間というものはありませんでしたし、いったい次に何が起きるのか前もって知ることもほとんどできませんでした。日本人僧侶が3年かかって学ぶことを、すべてこの期間中に教え込もうというのですから、自由時間になりそうな可能性のある時間はすべて法要の練習にあてられました。同じ儀式の配役に2度続けて当てられることはありませんでしたから、わたしたちはわけがわからなくなり少し反抗的な気持ちが起きたりしました。

しかし、講義は大変印象深いものでしたし、原田老師、奥村老師、采川老師、五十嵐老師の講話を聞きながらとったメモでわたしのノートはぎっしり埋まってしまいました。彼らの理解したことを伝えようとする真剣な取り組みにわたしは感動させられまたおおいに励まされました。夕方には独参の時間もありました。アメリカでのわたしの修行では独参というものを経験したことがありませんでしたので、最初はどうなることかと不安でした。それでも次第にそれに慣れていきましたし、その価値を認識するようになりました。原田老師に独参するときにつまらない質問を持っていかないようにしようと一生懸命でした。同室の和幸さんとわたしは毎日おたがいに「質問が浮んだ?」とよく尋ねあったものです。良い質問が浮かばないときには、独参には行きませんでした。原田老師の答は常に鋭くまた洞察に溢れるものでした。

以上が5月の研修所の印象です。5月と11月までの間は、ミルウォーキー禅センターで必要とされるさまざまな仕事をこなし、永平寺での法要のための新しいお袈裟を縫い、9月にわたしが永平寺に引率することになっていた15人の旅行団の事細かな旅行プランを立てたりしました。9月になってわたした

ちは京都を皮切りにまず興聖寺に立ち寄りました。自分がなぜ11月にまた発心寺の研修所にもどるのかという理由がわかったのはこの興聖寺を訪れたときでした。興聖寺は小さな寺でした。そのたずまいを見ながら、興聖寺を創建したころの道元禅師がどれほどの勇気と決心と誠実さをもたなければならなかったかがひしひしと感じられ圧倒される思いがしたのです。彼の足跡をたどって歩いてみたいというほとんど内臓から突き上げてくるような強い望みが湧いてきたのです。そしてそれは本腰を入れて取り組もうという強い志をもって発心寺にもどるということを意味していました。

11月の発心寺は寒さがこたえました。それでも、わが家に帰って来たような気がしました。ヨーロッパと日本の同輩たち、とくにかつての同室だった和幸さんに再び会えたことを喜びました。今回はもう日常の流れはわかっていたからスムーズにそれに入っていくことができました。前回同様、膝の故障のために托鉢には参加できませんでしたが、駐車場や通りの清掃をする作務隊には参加することができました。柿の実を採り、庭を熊手できれいにし、野菜の皮をむきました。差定は前回よりも少しだけ楽になっていましたから、時々休憩時間をとることができました。その時間には『正法眼蔵』をたくさん読みました。今回は法要の配役を続けて2度行なうことができましたから、その配役についてよく学ぶことができました。研修生たちはおたがいを助け合うようになり、最後の「ショー」がうまくいくようにしようと決意したのです。実際、最後の日の朝課はわたしたち外国人が行なった最高の朝課でした。

さて、わたしの手元には何が残ったのでしょうか?それは、次のようなものです。わたしがいまや伝道教師であることを告げる立派な証明書。弟子達に対してどのようにふるまうべきかという責任感。わたしの机の上方にかかっている墨で書かれた美しい絵(それはわたしたちのために日本人スタッフが払ってくれた配慮と骨折りの象徴です)わたしたち外国人が溺れてしまうことなく泳ぎ渡ることを援助してくださった大岳さんへの恩義の気持ち。古き伝統に深く根をおろすこと、伝統の細部を模倣するだけにおわる独創性の欠如に陥らないこと、そして自分自身の文化のなかで仏法を自分自身のものにしていく勇気をもつようにという原田老師の訓令にかならず沿う努力するという決意…。

日本人、ヨーロッパ人、アメリカ人が仏法を行ずるために、そして深く古い伝統と現在における喜びとを分かち合うためにともに集った4週間。それはおこなうだけの価値が充分にあることでした。

## 伝統と変革

### 昨年の伝道教師研修所を振り返って

#### ルメー大岳

##### 国際センター書記

日本の内外にある曹洞宗の寺院では毎朝、朝課で五つのお経を誦読するのがならわしとなっています。そのうちの三番目のお経はたいていの場合『参同契』かあるいは『宝鏡三昧』です。それは幾世代にもわたって連綿と（仏法の）灯火を伝えてきた仏や祖師たちに対して捧げられるものです。禅宗を際立たせている特徴のひとつはひとつの世代から次の世代へと法を伝授していくことをとても大切にしているところにあります。ですからここでは「伝統」というものがたいへん重視されているのです。

日本の僧堂で誦読されるお経の多くは、そのあとにあげられるすべての回向と同じようにいまだに古典中国語で書かれ、またとなえられています（日本語の発音ではありませんが）。中国から日本へ禅が伝えられてからもう何百年という時が経過している現在においてもそうなのです。回向本が古典中国語の語順で書かれているために（中国語の文法は日本語の文法とはまったく違って）日本の僧侶たちはわざわざ特別の時間を割いて、それを日本語の語順でどう読むかを習得しなくてはならないのです。

西洋人にはいかにも古臭いやり方のように思えるこの方法を若いアメリカ人僧侶に説明したことがあります。すると彼は即座にこう声をあげました。「でもどうしてなんですか？」まったくの時代遅れとしか思えないこういうやり方をいまだにかたくなに守っている理由が彼には理解できなかったのです。これは、わたしたちアメリカ人のもっている非常に実用主義的な考え方の好例です。日本語ですらすら読めるような語順で書けばいいのに、何故そうしないのか？頭に浮ぶ唯一の答は「禅においては伝統というものがなににもまして大切なのだ」ということでした。禅に限らず他の分野においても、日本人にとって中国は文化の源だと考えられていました。ですからここであげた禅宗の例が決して特別だというわけではないのです。それはまた西洋においてカトリック教会がいつい最近になるまでラテン語を儀式のための正式な言語として使いつづけてきたこととも対応しています。

しかしながら、禅においては伝統の重視ということは法要の問題だけに限られているわけではありません。禅について教えるときに言及される多くの逸話は中国から伝わってきたものですし、それはいまだに中国語の語順で発音されています。禅の老師方がさまざまな種類の書を書くのに用いる何千もの禅語のほとんどすべては中国から来たものです。禅が日本に伝えられた

のはもう800年も昔のことだという事実を考えると、これらのことはほんとうに驚くべきことではないでしょうか？言語や伝統が禅を正統なものとするためにどのように使われてきたかを理解するのは難しいことではありません。

ここまで長々と書いてきたことは、昨年、福井県小浜市にある発心寺で開催された伝道教師研修所での経験をわたしが振り返るにあたっての長めの序文になります。今回の研修所には6人のヨーロッパ人禅指導者、2人のアメリカ人禅指導者が集い、1ヶ月にわたる特別安居に参加しました。ここ何年かにわたって曹洞宗宗務庁は古参の西洋人指導者をそれとして認許するためのこうした特別研修の集まりを何度か開催してきました。最初の研修所は1980年代に修禅寺、大乘寺、興聖寺という日本の3つの僧堂を会場として開かれました。1990年代にはグリーン・ガルチ・ファームを会場にして研修所が開かれました。昨年の研修所が開かれるまでには数年間のブランク期間がありました。

今回、発心寺が会場として選ばれたのはおそらく二つの理由からでしょう。第1の理由は発心寺の堂頭であり師家である原田雪溪老師が曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監に任命されたことです。今回は6人のヨーロッパ人が安居に参加することになっていましたから、原田老師にとっても彼らにとってもお互いを知る絶好の機会になることが期待されたのでしょう。第2の理由は、発心寺が日本の田園環境にある修行の盛んな僧堂だということです。長年にわたって海外からの修行者がたくさん訪れ修行してきた場所ですから、彼ら西洋人指導者を受け入れることが比較的容易にでき、同時に日本の伝統的な僧堂修行の経験を彼らに味わってもらえることができます。伝道教師研修所の主な目的は、いろいろな理由のために日本の僧堂で長期にわたる修行をすることができず、そのため自分の弟子を東京の曹洞宗宗務庁で正式な僧籍登録をすることができない西洋人禅指導者に伝道教師の資格を与えることです。

研修所における実際の安居は2週間ずつ2つの期間に分けられました。第1期は5月の後半、第2期は11月中旬におこなわれました。研修のテーマは『法の伝授 伝法』でした。原田老師が主任講師をつとめ、戒律の問題が論じられている『梵網經』について道元禅師がおこなった提唱を注釈した『禅戒鈔』についての講義がありました。老師は全部で約20回におよぶ講義をおこないました。研修生だけでなく発心寺で修行しているものにとっても、今回の研修所の「呼びもの」になったのはまちがいないこの老師の講義でした。研修が開かれている間、原田老師は『無門関』の諸則や『学道用心集』をひきあいに出して論旨を明確にしながら、たえず法の伝授（教外別伝）について語りました。参加者たちは講義のあとや個人的に独参にきたときに、不明確な点

をはっきりさせるためにすすんで質問をするようにと励まされました。これもまた今回の安居の「呼び物」のひとつでした。他の講師としては、奥村正博師が『永平広録』と『菩提薩多四摂法』について、また采川道昭師が『従容録』について話をしました。

伝道教師研修所のもうひとつの眼目は研修生たちが日々の僧堂生活に実際に参加するということでした。発心寺の差定は、朝四時起床、坐禅1柱、5時から法堂にて朝課。そのあと粥座。研修所の第1期中には粥座と昼食は禅堂内での応量器による正式の行鉢がおこなわれました。発心寺では普段なら、8時から10時半までは作務があり、その後11時に昼食をとるのですが、研修所開催中は講義が多くあるため作務の時間は短縮されました。昼食の後短い休憩のあと、再び作務を1時から4時半までおこないます。研修所開催中はこの時間帯も短縮して、研修生が朝課や晩課において果たさなければならない配役をきちんとこなせるようないろいろな練習をおこなえる時間をもてるようにしました。夕方五時に晩課があり、夕食は5時半から、そのあと開浴。7時20分から坐禅2柱。この日分行持の差定の他に、小浜市内での托鉢（通常なら安居期間中は月3回行かないです）や地域の寺院への研修旅行などの活動も含まれていました。

西洋にある禅センターのなかにはそこでの修行に日本の伝統的な僧堂修行の形態を多分に取り入れているところもありますが、昨年の研修所に参加した人たちの多くは応量器（少なくとも日本の僧堂で使われているような六つのお椀からなる正式の応量器）を一度も使ったことがない人達でした。毎日行こなう法要でのさまざまな配役の進退作法は言うに及ばず、法堂での基本的な進退作法でさえまったく知らない人も数人いました。わたし自身に関していえば、こういう基本中の基本を彼らに教えなければならないことが一番大変な仕事でした。さまざまな食事作法、法要での配役、法衣や着物など一般的な身だしなみをちゃんと整えることなどが真剣な態度をもって習得しようと時間をかけて努力をするに値することだと彼らを納得させたいうで、さらに個々の型をひとつひとつ教え、彼らがそれをきちんとこなすことができるかどうかをベストを尽くして見守るといのは大変なエネルギーを要することでした。この目的を達するために、曹洞宗宗務庁の数名のスタッフと発心寺の雲水たちが協力して動きました。ほとんど、あるいはまったく僧堂経験がない人たちにこういう見慣れない環境に入っているいろいろな形（全員ではないにせよ何人かにとっては必要だとはどうしても思えない形）を短期間で習得せよというのは確かに多大な要求だったでしょう。

この点に関して、わたしができたもっとも説得力のある議論の一つは発心寺での生活においておこなう活動は、すべて坐禅がさまざまに展開したものだということ、つまり坐禅とはそれを単なる一つの活動として生活の中に取り込むことができるようなものではなく、実は坐禅の内部でわたしたちが生活活動を行っている

のだということでした。わたし自身、坐禅のこうした側面をほんとうに理解できるまでにはずいぶん時間がかかりました。私が発心寺で修行を始めたまだ若者だった頃には、儀式的な形式に対して大きな抵抗感を感じていました。ですから、長いこと毎朝朝課に参加しないで、台所で朝食を調理することで満足していたのです。数年が経ってはじめて、他の雲水たちと調和しながら、坐禅の別の形としての法要をつとめる美しさがわかるようになったのです。研修生たちに僧堂生活のこの側面がいかにか大きな価値のあるものであるかを伝えるにあたって、このわたしの個人的な経験が大いに役に立ったと思っています。

西洋の人々にとって仏教が持つもっとも魅力的な側面の一つは、何世紀にもわたって持続されてきたその柔軟性です。仏教がインドから中国、朝鮮、日本へ、そしていま西洋へと伝播するなかで、仏教はその土地の文化を変えようとするよりはいつも自らを新しい文化に適応させてきました。しかし同時に、仏教はそれぞれの文化にきわめて大きな変容ももたらしたのです。それはおそらくそこに前からある土着の宗教を抑圧しようとするのではなく、それらを仏教の教理のうちに取り入れることができたからでしょう。多くの西洋人が禅の普遍性を強調して、禅は自分達のものであると熱心に主張してきました。同時に、伝統的な日本の禅を拒否する人たちもいました。それは日本の禅が伝統のなかで行き詰まっており自分達にとってもはや適切なものではなくなっていると感じたからです。

一方に伝統、他方に伝統を変革しそれから自由になりたいという希望とがあって、その間に緊張関係があるのを感じるのは、まさに東洋と西洋が接しているこの場所なのです。曹洞禅はいま岐路に立っているように思います。決定的であり、かつ本当に唯一の重要な課題となっているのは、西洋であれ東洋であれ、法を真実に伝えていくということです。もちろん、それは教義の外でなされる伝授（教外別伝）です。そして同時にいまわたしたちが坐禅をすることができるのはひとえに何代にもわたって途切れることなく続いてきた偉大な禅匠たちの血と汗と涙のおかげなのです。それはわたしたちが否定したり見逃したりすることが到底できないものです。多くの西洋人は禅についての自分が理解していることや新しい形をつくりだす試みに確たる自信をもちたいと思っています。その一方では少なくとも何人かの西洋人禅指導者は伝統的な日本の禅からまだ学ぶべきことが残っていると感じていることもわたしは知っています。昨年の伝道教師研修所のお世話をするというのは大変な仕事ではありましたが、そこに関わる誰にとっても努力を払うに値するものだったとわたしが言う時、それはわたしだけでなく発心寺の者すべての感想だったと、その事実だけからでもわたしは確信しているのです。

# 南米ペルー／知られざる開教100年史

## 開教の動機と日系人の認識

### 太田宏人

1903（明治36）年、曹洞宗の上野泰庵（うへの・たいあ）、浄土宗の松本赫然（まつもと・かくねん）および樹下潜龍（きのした・せんりゅう）の三師により、仏教が南米の地に初めてもたらされた。

本年は開教100周年の佳節である。そこで本稿では、使命に燃えて南米大陸に渡った僧侶たち、とくに上野泰庵の足跡を追いながら、南米最古の仏教寺院・泰平山慈恩寺（曹洞宗）の略歴を紹介する。

南米開教の動機は、ハワイや北米と同様、日本人移民への布教活動であった。日本人による南米への集団移民の嚆矢はペルー（秘露）で、1899（明治32）年に790人の第1回移民（第1航海）が同国へ上陸した。彼らは、「耕地」と呼ばれた大規模プランテーションと4年契約を結び、砂糖黍や綿花栽培、製糖作業に従事した。しかし、不慣れた重労働と劣悪な住環境および伝染病により、錦衣帰郷を夢見た多くの若者が絶命した。伊藤一男という新聞記者は“第1航海では契約満了までに79%が死亡。戦闘部隊ならばほぼ全滅状態”と記す（『アンデスへの架け橋』日本人ペルー移住80周年祝典委員会、1982）。

これを裏付けるような挿話が、ペルーに残る。それは、カサ・ブランカ耕地（リマ県カニエテ郡）でのこと。死亡者が続出し、葬儀による休業者が後を絶たない状況をよしとしない耕地主が、作業能率を維持するため一人ずつの葬送を認めず、部屋の隅に遺体を安置させ、死者が数人になってから合同葬を出させた——、というものだ。

この挿話は、移民たちが耕地を離れて都市部に集住し、商業を営むようになって以降、ペルーの日系社会で“伝説”化する。非業の死を遂げた者への同情や慰霊は、「耳なし芳一」に語られた壇ノ浦の平家一門を例にとるまでもなく、大衆の心に訴える。そして「悲惨な初期移民」の存在が、1907（明治40）年創建（曹洞宗両大本山からの山号寺号下附は翌年）の慈恩寺の「存在理由」として固着する。

慈恩寺には多数の日系人の位牌が保管されている。伊藤一男は、「戒名のない位牌」「手作りの位牌」が多いことで「悲惨さ」を強調する（『季刊 海外日系人』第5号、海外日系人協会、1979）。だが、歴代の布教師がペルー全土の日系人の葬儀に関与できたはずはない。戒名を使わない沖縄系移民も多い。既製の位牌も売られていなかった。戒名がなく、手作りの位牌が多いこ

とは悲惨さの例証にならない。

ペルーに派遣された今村良治外務書記生の報告では、初年度の死亡は98人である。しかも、移民たちが労働や環境へ順応した次年度からは、死者数が急減している（『日本外交文書』第36巻）。790人のうちの98人は少なくはないが、「79%」は誤謬が過ぎる。伊藤一男の思い込みもあるだろうが、“初期移民はかなり死んだ”というコンセンサスがすでに日系人間に確立されており、彼はそれに影響されたのだろう。ただ、移民史研究における氏の業績は他の追随を許さないものがあり、一面の過誤をもって批判するのは妥当ではない。謳ったのは、伊藤氏だけではない。筆者も同じ轍を踏んだ。

一般の日本人と同様、現在の日系ペルー人も自分たちの歴史に暗い。しかし、詳細な歴史事実は知らなくとも、語り継がれた「悲惨な初期移民」という共通認識は、多くの日系人が継承しているようだ。

ところが、ペルーに渡った上野泰庵らの熱意は、死者供養ではなかった。それは当時、各宗が国内で展開していた布教・伝導活動と同じ軌道上のものだった。曹洞宗務局（現曹洞宗宗務庁）の『宗報』（現『曹洞宗報』）に掲載された一連の記事が、彼ら海外布教師の渡航理由を明確に示す。

明治31年（ペルーへの移民開始前）発行の『宗報』第30号には「南米秘露國の宗教」と題し、ペルー移民を牽引していた田中貞吉へのインタビュー記事がある。記事の主眼は「異教徒の日本人移民がペルーで宗教的軋轢を受けるか否か？」である。明治35年の第142号では「海外布教」という論説が掲載される。引用すると、

「今や我が同胞の人民にして。西歐。東米。南濠。北露に散在する者は。幾千萬を以て數ふるほどなりき。宗教信者と。無宗教者とに拘はらず。凡そ人として心あらん者は。皆な宗教心あるべき筈の者なり。之れを指導するは司教者の天職なり」とある。

上野師のペルー渡航直後の第157号にも「海外宣教の時機」と題する論説が掲載され、「移民を教導する」師を激励する。これらの記事に、海外布教の契機としての「悲惨な先亡移民」は登場しない。

布教のモチベーションと、後世の日系人が考える「慈恩寺の必要性」「僧侶の派遣理由」はズレていた。この差異が、慈恩寺の歴史叙述を変容させ、日系人と同寺を断絶させる原因になっていく。



## 開教100年の第一歩

三師とも所属教団の命を受け、1903（明治36）年6月20日、第2回の移民集団1178人とともに英国船「デューク・オブ・ファイフ」号で神戸を出航した。ペルーのカヤオ港到着は同7月29日。南米開教の第一歩である。上野師は明治4年、松本師は同7年、樹下師は同12年生まれ。渡航時点の年齢は数えでそれぞれ32、29、24歳だった。

上野師は北部のランバリエケ県トゥマン耕地、松本師はリマ県カニエテ郡カサ・ブランカ耕地、樹下師はリマ市近郊のサンタ・クララ耕地に、各々移民監督として随行した。当時の教団は生活費を送らなかつたため、生きるためのアルバイトだった。上野師は曹洞宗大学（現駒沢大学）、松本師は浄土宗専門学院（現仏教大学）、樹下師は浄土宗学東京支校（現芝学園）卒のインテリで、修行を積んだ僧侶。労働監督というより風紀やメンタル面を担当した。

しかし翌年、松本・樹下両師は辞職してしまう。本来の目的である布教に、人々の関心が集まらなかつたため、という。「尤移民も毎日製糖場に於ては12時間畑に於ては10時間の労働に従事致候へば餘暇も無之（略）眞面目なる話は耳に入り申さず候」（『浄土教報』第653号／同38年）と樹下師は報告し、「當國の開教は時機今少し早きか」「僅少の同胞間に后援なく開教せんとするは最も困難」（同前）と嘆く。しかし師は、リマ市内の「日本人倶楽部」を拠点に布教を続行した。「一屋を借り受け、倶楽部を設け漸次教會的に進めん」（同693号／同39年）。

松本師は、「（移民取扱）會社も耕地（主）も移民も營利といふ觀念の外道義とか修養とかいふ様な精神的要求は殆ど皆無」「私共は何處へ行つても餘り歓迎されなかつた」と述懐する（同800号／同41年）。なお、松本師は36年10月に「藤井」に改姓している。カニエテ転出後は各耕地を転々とし、38年以降は日本人倶楽部に樹下師と同宿する。同倶楽部には会費が集まらず、生活は窮乏した。師僧の遷化もあり、松本（藤井）師は41年に帰国。

樹下師はその後、熱帯雨林地方のゴム採取地に移民と赴く。だが、ゴム価格暴落で移民事業が頓挫し、43年に帰国。両師の布教は、移民会社の協力を頼った「上から」のものだった。会社の背任行為が頻発、その権威は失墜していたとはいえ、この方策では、移民の心は掴めなかつた。

一方、上野師が赴任したトゥマン耕地は、問題移民が多かつたが、師は女子労働者の風紀向上に貢献した（『日本外交文書』第36巻）。しかし、集団脱走や移民間の殺傷事件が絶えず、見

かねた耕地側は同38年6月に134人の日本人を全員解雇。移民らはただちにカニエテ郡の諸耕地に吸収され、師は製糖工場にあったサンタ・バルバラ耕地に入った。そして喜捨を集め、同地に伽藍を建てる（同40年）。

「僧上野泰庵氏（略）ノ熱心ト本耕地移民ノ寄附千數百圓トニヨリテ建立セラレタル一寺院アリ（略）壯麗ナルモノニアラザルモ兎も角南米ニ於テ建立セラレタルモノノ嚆矢ニシテ且現今ニテハ南米唯一ノ佛寺トシ毎日曜日ニ説教アル外移民ノ葬式、死亡者ノ法要等ヲ行フ」（野田（旧姓今村）良治「秘露國本邦移民労働地視察報告書」、明治41年）。

藤井師は帰国途上、布哇に寄港しペルー開教について講演。同寺院に言及している。「（上野師は）近來では小さな堂を立て、貰うて（中略）私は往て見たことはありません」（『浄土教報』第800号／同41年）。

寺に隣接して南米最古といわれる日本人小学校も建てられ、上野泰庵が教鞭をとった。

初め寺は「仏徳山（一説に太平山）南漸寺」と称したが、明治41年4月15日付で曹洞宗両貫首より正式に「泰平山慈恩寺」と名付けられ、二度の移転を経て現在にいたる。なお、慈恩寺では創建当初から他宗派の檀家の人々が世話役となっていた。

大正5年の『宗報』第457号は、カニエテ郡の移民約530人による恤兵金1239円20銭（慈恩寺の上野泰庵取扱）の日本着を報じる。上野師のペルー滞在は10年を越えていた。布教の努力は結実し、感化力は揺るぎないものになっていたのだろう。

師は、移民会社はおろか宗門の援助さえ仰がず、『宗報』にも記事を送らなかつた。1917（大正6）年8月、慈恩寺と布教継続を後任の齋藤仙峰（さいとう・せんぼう）に託し、14年ぶりで故郷・兵庫に帰着する。上野泰庵は、46歳になっていた。

## 慈恩寺と後続の布教師たち

山形出身の齋藤仙峰は1917（大正6）年2月、ペルーに上陸。齋藤師は直後に一時帰国し、結婚。妻を連れて赴任している。ところが、大正8年4月5日、感冒によって急逝。31歳だった。南米開教初の殉職者である。

後任は、兵庫県の圓通寺で安居していた広島出身の押尾道雄。圓通寺は上野師もつながりが深かつた。また、押尾師がのちに27世住職となる広島・龍雲寺の23世はハワイ開教の第一世・川原仙英師（上野師と同年に渡航）。上野師も含め、彼らは皆同じ、兵庫・圓通寺の法類だった。

押尾師の着任は大正8年。辞令は2月に出ているが、齋藤師

の遷化以降にペルーに上陸したようだ。

押尾師の着任前後から、日本人移民の耕地離れは加速する。同6年には在留邦人の統括団体「秘露中央日本人會」も生まれた。同会は、1921（同10）年のペルー独立100年祭を記念し、寄付を募ってインカの英雄「マンコ・カパック王」の巨像をペルー政府に寄贈するまでに成長している。

大正13年、慈恩寺は同郡内サン・ルイス町に転居。この建物は現在使われていないが、敷地内には齋藤仙峰の墓が残されている。

教線拡大に尽瘁し、昭和2年に帰国した押尾師の後任は秋田県出身で愛知で育った佐藤（旧姓渡辺）賢隆（さとう・けんりゅう）。着任直後の昭和2年、師は首府リマ市に布教所「慈光會」を開く。一時はいくつかの日本人自治村を擁したカニエテ郡だったが、当時残っていた日系人は100家族を切っていたという。

集会や法要など、慈光會の活動は盛んだった。リマ在住の佐藤師は各地方へも精力的に巡錫したが、カニエテ郡の慈恩寺を本拠とする姿勢は崩さず、同郡の移民にも敬慕された。だからこそ、師の要請に多くの邦人が応え、彼らの浄財によって同郡カサ・ブランカ耕地のはずれに、日本人慰霊塔が完成するのである（同8年）。慰霊塔がそびえるカサ・ブランカ日本人墓地は、それ以降つねに慈恩寺とワン・セットで「移民の聖地」として扱われるようになる。

同10年、佐藤師は41歳で病死する。後任は中尾證道（なかお・しょうどう）で、同年の赴任。師は翌年乃至12年に、リマに「南米山中央寺」を開き、曹洞宗務院より同寺主任に任命される。宗門公認の山号寺号は、まるで同宗の“南米開教総監部”である。しかし、ペルーの移民に宗派のこだわりはなかった。そして、ペルー社会との深い関係を築き始めた日系人に対する“より良く生きるため”の布教・教化活動は、すでにカトリック教会にその座を奪われつつあった。仏教への期待は、教義や教化とは無縁の「死者への儀礼」だけで、布教師よりも読経師が求められた。しかし、日本から派遣の海外布教師・中尾證道は“布教”に固執する。そして師は孤立し、大戦前夜の同16年、帰国した。

太平洋戦争の端緒が開かれると、ペルーも対日宣戦。南米開教は中断された。

戦後の昭和30年、曹洞宗は挙宗態勢でブラジル布教を開始する。当時の『曹洞宗報』には、これをもって“南米開教の第一歩”とする表現が目立つ。遡ること半世紀、ペルーに刻まれた5人の布教師の軌跡と、彼らを支えた日系人の存在は、封印されてしまった。

そしてペルーの日系社会は、読経業者時代を迎える。お経が読めれば、誰でも僧になれた。1961（昭和36）年11月、曹洞宗宗務庁の辞令で一世移民・清広亮光（もしくは亮徹／きよひろ・りょうこう＝りょうてつ）が慈恩寺復興主任となった（正式には「住職」ではない）。清広師によって、慈恩寺は機能的には「復興」する。1977（昭和52）年、日系人多数の寄付をはじめ、曹洞宗宗務庁やペルーの邦系企業からの金銭的援助を受け、同郡サン・ヴィセンテ・デ・カニエテ町の現在地への移転・新築も果たした。だが、同寺が参禅道場に復することはなく、つねに「悲惨な移民先没者」が強調され、彼らを集団で祀る特殊な慰霊施設として特化していった。いつしか清広師の手で寺の由緒も変質し、「死者のために創建された納骨堂」と表現されるまでになった。清広師の恣意的な改変というよりも、日系人の意識の反映と見るべきだろう。

◎……◎……◎

南米開教および新寺創立という大事業を成した上野泰庵。しかし、その任期中に日本の仏教教団の海外布教は国策に迎合し、布教の主たる舞台はアジアへ移っていた。ペルーの慈恩寺への関心は、昭和50年代まで同宗内部でさえ霧消していた。上野師が『宗報』に掲載した広告（帰国挨拶）には凱旋というような晴れやかな気分が滲む。ところが、周囲、とくに宗政中心からの反応、後続布教師への目に見える支持はなかった。

帰国後、上野師は兵庫の第二曹洞宗務所長などを歴任するが、中央へは出なかった。戦前の『宗報』に新年広告を比較的多く出したが、他の宗侶が自坊の名を明記するなかで、ひとり上野師だけは決して自坊の山号寺号を記さなかった。そこに、どんな思いが込められていたのだろうか。上野師は、郷里の人々に尽くし、愛された。自坊では託児所を開き、子どもたちを温かく育てた。

1950（昭和25）年2月11日、隠居していた建物の火災によって示寂。79歳だった。生涯独身で筆不精。最期までペルー時代のことを一切記録に残さなかった。

一方、日本に生還した押尾道雄は朝鮮半島で、中尾證道は南洋テニアン島でそれぞれ布教に従事し、終戦によって引き揚げている。ともに昭和20年代前半、遷化した。

なお、清広亮光が去世した平成4年以降、慈恩寺は無住である。

おおた・ひろひと 1970年生まれ。  
ペルーの日本語新聞「ペルー新報」元編集長。  
現在は日本に在住。

## 打坐をめぐる断想集 私の『坐禅参究帖』（十一）

藤田一照

### 《断想 20》 兀坐のなかの動き（一） —全身呼吸の脈動—

坐禅の別名として「兀坐（ごつぎ）」とか「兀々地（ごつごつち）」という言葉がある。そこで使われている「兀」という漢字は「高い山の頂上に広い平地があり、しかもその平地に木が一本も生えていない」様子を象形的にとらえたものだという。木のない山だから、どんな大風が吹いてもビクとも動かない。この字は、「ゴツ」というその音の喚起するイメージとともに、坐禅の「不動」のさまをじつによく表している。したがって、『普勧坐禅儀』にある「兀々と坐定して・・・」という指示は、「不動の山のようにどっしりと動かずに坐って・・・」という意味になる。坐禅をしている時に、次々と頭に浮かんでくる思い（感情も含む）や体のあちこちに生じる感覚（快感、不快感、痒み、痛みなど）にいちいち反応して、体をグラグラ、ゴソゴソと動かし、姿勢をあれこれ変えていたのでは、落ち着いて坐禅をすることなどとうてい不可能だ。だから、坐禅の指導において、なにはともあれ、ともかくじつと動かずに坐り続けることが強調されるのは当然のことだ。

坐禅においては、体のどこかに痒みを感じるとか、予期せぬ物音を耳にするとか普段ならばなにげなく体を動かしてしまうような状況になっても、搔いたり、振り向いたりせず、あえて体を動かすことはしない。あるいは体に強い痛みを感じるとか、心に大きな感情的動揺が生じるとか普段ならともじつと坐ってなどいられない状況になっても、坐を解いたり立ちあがって部屋から出ていったりせずに、あえて坐り続けるのだ。我々は、普段そういう状況になると、多くの場合習慣的・無意識的に反応して体を動かしてしまい、自分に都合のいいように当面の状況を変えようと試みる。それはたいていが自分の習慣的パターンの反復・強化にほかならず、新しい展開や学びの可能性はきわめて少ない。それに対して坐禅においては、自覚的に不動の態度を貫き、状況をはっきりと認識・受容していながらも、あえて何もしない＝体を動かさないのである。それは、「習慣的パターンの抑止」という意味をもつ。そのおかげで、自分の日頃の反応パターンが「不動への抵抗」として浮き彫りになり、普段ならかいまみることのない自分に親しむことができる。そして、それを通して自分についての新しい洞察への道がひらけ、習慣的パターンに引き回されない力が養われていくのだ。

このように、坐禅という行の本質が、なによりもまず「不動＝体を動かさない」ことのなかにあることは確かだ。（もちろん心の不動ということも論ずべき重要問題だがここでは触れない）しかし、いのちの通った実際の坐禅における「不動」のありかたは、死物

（いのちの通わぬ物）の不動とは全く違っている。（厳密に言えば、すべてのものが動いているのであるから、その意味では死物すらじつとしてはいないで動いているというべきなのだが）たしかに正身端坐で兀々と坐っているとき、外からは微動だにしていられないように見える。しかし、実は非常に微細ではあるが「動き」が確かにそこにはあるのだ。しかもそれは、自分が意図して起こしている運動ではなく、自然に、自発的に起こっている動きである。それは「生きた坐禅の息づき」とでも言うべきもので、兀坐に内在している動きなのだ。

坐禅というと、とかく「不動」の面ばかりが一方的に強調されるきらいがある。坐禅＝兀坐＝不動という等式に間違いはないのだが、それを大雑把に受け取ると誤解の元になりかねない。事実、そういう思い込みにもとづいて、文字通りの「不動」にならねばと、筋肉を緊張させ体を石のように固くし、息を詰めて坐っている人を時々見かける。しかしそういう無理で不自然な坐り方では、体は静止するどころか意に反して絶えずグラグラと動くであろうし、息も不規則になり、アタマのなかもさまざまな思いで一杯になってしまうことであろう。実は、正身端坐の「不動」は、重力に対して適切な関係で坐り、そのことによって体から余計な緊張がすっかりほどけ、ゆったり・すっきりと楽に坐ることによって実現されるべきものなのだ。そして、坐禅において、身心が落ち着くところへ落ち着いて本当に「すわる」とき、（すわる＝「定まりて動かず、居所、善くかなう」『大言海』）、そこに自ずと立ち現れてくる「動き」があるのだ。だから「坐禅は不動の姿勢である」といっても、それを表面的・単純素朴に理解してことたれりとするべきではない。正しい坐禅像を描くためには、その「不動」を背景とした「動き」というものがそこにあることに眼をつける必要があると思う。不動に見える坐禅のなかには、実はヴァリエティに富んだ豊かで微細な動きの世界が秘められているのだ。だから、静止的・固定的な「ポーズ」というこれまでの坐禅のイメージから脱却して、動的でプロセス（過程）的な「ダンス（？これは言い過ぎかもしれない）」という新しい坐禅のイメージをつくっていくべきではないだろうか。

それはともかく、では兀々と坐定している時に立ち現れる「動き」とはどんなものなのだろうか。ここでいう動きは、自我意識から発する、坐禅の不動に抵抗し、不動を壊すような意図的で粗大な動きではない。繰り返しになるが、それは、坐禅が「いのちの通った正しい坐禅」であることから必然的に生まれてくるものであり、また「筋肉と骨組みで正身端坐をねらうこと」から必然的に出てくる無意識的で微細な動きなのである。だから、それは坐禅の「不動」の中から生まれてくる「動き」であり、「不動」を支えるような「動き」なのだ。

こうした動きの中でもっとも気づきやすいのは呼吸に伴う動きであろう。坐禅においては自然な丹田息で呼吸が行われている。

それがいかに静かで微かな息であっても、呼吸は常に「動き」をはらんでいる。正しく坐っていると、つまり全一な坐禅であれば（前回の断想を参照）呼吸に直接関わる部分（胸部や横隔膜周辺・下腹）だけでなく、呼吸とともに実は全身が微妙に動いているのだ。息を吸うと、まず下腹や腰が膨らみ、その動きが胴体部、頸、頭、上肢、骨盤、下肢へと全身に連鎖反应的に拡がっていく。池の水面に石を投げ込むと波紋がまわりへと拡がっていくように。（以前にふれた「同時相関・連動の法則」を想起されたい）息を吐くと、下腹や腰が縮み、その動きが同じような経路で全身に伝わっていく。

（もちろんこうした全身に波及する動きはきわめて微細なものであって、坐相が呼吸によって動揺しているようには見えない。もし呼吸に由来する動きが外目にははっきりと見て取ることができるほど大きいようならば、どこか坐り方に問題があるといつてよいだろう。）

正身端坐が深まり、体がほぐれ、意識が覚めていくにしたがって、こうした全身にわたる呼吸運動はより繊細・微妙なものになるが、それだけよりはっきりと「覚触（かくそく）」されるようになる。そのとき坐禅の当事者の体感においては、呼吸に伴って全身が膨張・収縮をくりかえしているように感じられる。それは自分が単細胞生物のアメーバーとなり全身が膨らんだり縮んだりして脈動（一定の平衡状態にあるものが微小な周期的変化をする現象）しているといったような感じである。私は自分が坐禅をしていて、呼吸に伴うこういう全身の脈動（全身が大きくなり小さくなり、ゆるみしまり、のびちぢみを繰り返す）をはっきりと感じるとき、野口体操を創始された野口三千三先生から教わった「原初生命体感覚」という言葉を思い出す。

「原初生命体感覚」というのは、野口体操の発想の根源となっているある存在感のことで、「自分自身のまると全体が、オパーリンの生命の起源における〈コアセルベート〉の未分化・全体性のあり方とそっくりそのまま、かさなりあい融けあってしまったような感覚」を指す。「わたしにとってこのような、原初生命体コアセルベートと渾然と重なり合っとうまれる自分の存在感が、目覚めるときのあらゆる行動の根源的感覚にもなっているのである。自分自身で納得できる行動ができたときには、この原初生命体と一体となっている。あるいは、それが基盤・母体・背景・根源になっているという実感がある。」

（『原初生命体としての人間』岩波書店刊）

坐禅中の呼吸は丹田呼吸であるといわれる。しかし、それが、丹田周辺だけに限られる呼吸であり、その部分のみが膨らんだり縮んだりするような呼吸だと解するならば、それは誤りだ。それは、実際には全身が関わっておこなわれる全身呼吸（全身が呼吸器官！）なのであり、丹田という局所の名前は、呼吸運動の起点として感じられる場所を指し示しているだけなのだ。呼吸に不可避免的に伴っている「動き」をうけいれることができない許容量の小さい、かたくなでこぼばった「不動」でもなく、その「動き」によって容易に乱される弱々しくかじかんだ「不動」でもない、柔軟で弾力性に富むおらかな「不動」。全身呼吸の脈動が、体の中をなめらかに伝わっていきけるような、「原初生命体感覚」に浸れるような、そんな坐禅の「不動」のありかたを、実地にさぐっていかなければならない。（つづく）

## ニュース

◎2003年2月14日～21日 カリフォルニア州サンフランシスコ市サンフランシスコ禅センターにて、国際センター所長奥村正博師による眼蔵会が開催された。奥村所長は「正法眼蔵行持巻」を提唱され、約70名が参禅聴講した。

◎2003年1月30日 福井県発心寺徒弟ルメー大岳師が北アメリカ国際布教師に任命された。ルメー師は30年日本に滞在され、26年間発心寺専門僧堂にて修行、本年3月21日付にて曹洞宗国際センター書記に任命され、今後の活躍が期待されている。

・ジョン・マックレー氏の「Soto Zen in America」は今回は休載いたします。

## 国際行事

◎2003年10月15日～19日

曹洞宗北アメリカ開教（国際布教）並びに、両大本山北米別院創立80周年記念慶讃法会がカリフォルニア州ロサンゼルス市両大本山北米別院禅宗寺で開催される。主な記念行事は以下の通り：

- 1) 80周年記念授戒会
- 2) 80周年記念慶讃法要
- 3) 禅宗寺開山歴住諷経
- 4) 開教物故者諷経
- 5) 国際布教師及び伝道教師研修会（授戒会について）

◎2003年10月24日～26日

曹洞宗ハワイ開教（国際布教）100周年記念祝賀行事がハワイ州ホノルル市ワイキキ・シェラトン・ホテルで開催される。主な祝賀行事は以下の通り：

- 1) 100周年記念親睦ゴルフ大会
- 2) パネルディスカッション
- 3) 歓迎交流夕食会
- 4) 100周年慶讃法要
- 5) 100周年記念祝賀会